

芸豪烈伝その17 末広友成

すえひろ ともなり

「浪曲の魅力は説明できないほどスゴイよ」

写真・森 幸一ほか 文・おさだ五郎蔵



日本人の平均寿命は男性が約77歳、女性はや約83歳。

末広友成はこの4月で85歳になる。百歳を越える人が珍しくない昨今だが、85歳で現役バリバリの存在は貴重だ。

長命の秘訣、芸の真髄をうかがいに、東京は亀有の自宅を訪ねた。

「テレビでは、女の子がパンツを見せ

すえひろ ともなり 本名・身竹清作。新潟県上越市の出身。明治44年(1911)4月1日生まれ。尋常小学校を出て上京、兄が経営する精肉店で働く。浪曲ずきが高じ、末広友若に弟子入り。昭和9年(1934)埼玉県岩槻市で初舞台、「河内山宗俊」を読んだ。昭和15年(1940)、日比谷公会堂で看板披露「私ひとり」で三千人のお客さん呼びましたよ。趣味はボクシング鑑賞。

れば売れる時代でしょう、今は。

こんなことが飽きられて、いつかまた古典の話芸である落語や講談、浪曲が日の目を見る時がきますよ。しかし、あと20年は来ないかな。ハハハハ」

「85歳で浪花節をやっている。われながら驚いて、あきれています。

私が入門したころ、50歳ぐらいの浪曲師が舞台で苦しうにウナツテいるのを見て、ここまでやりたくないなと思った。もとも当時は60歳ぐらいで、あの世にいつてたけどね」

「浪曲の魅力ねえ、説明できないくらい好きなんですよ、ハハハ」

浪曲のはなしになると、友成師の顔に笑みがこぼれる。

友成師は、奥さんと合三味線の栄子さんと二人で暮らしている。

「子供はいないの。姪や甥がいて、それが子供がわりだね。寂しくないよ。それにね、子供がいたら浪花節を続けていたかどうか。なんせこの商売は旅が多かったし、周りに不義理を重ねるからね」

栄子さんも81歳だが元氣そのもの。結婚は昭和15年、以来56年間、二人は芸のキズナで固く結ばれている。

「おとうちゃんは几帳面でまじめな性格。稽古は厳しいんですよ。本当に厳しくて、私はよく御不浄で泣いてたわ」

友成師のお宅は小さいながら、整理整頓されている。ビデオの機材の間に



平成4年(92)テレビ東京の、結婚式ができたかったカップルが挙式する特別番組に出演。結婚52年目にしてウエディング・ベルを鳴らした(伊豆の修善寺にて)

「私と女房のなれそめ? 忘れちゃったよ。古い昔のことだもの。あんときはね、そう、二人とも寒くなったから一緒にあったの」  
「いまだに耳も目もしっかりしています。わるいのは、そう、アタマだけ。ハハハハ」

友成夫妻には、戦前の日本人に共通した徳目がある。それは謙虚さや、礼儀正しさ、勤勉などが、なによりも明朗快活で、友成師の冗談は軽妙で楽しい。  
「早くお客さんにお茶やお菓子を出しなさい。なに、もう出た。じゃあ、あと舌でも出しとけ」  
「私と女房のなれそめ? 忘れちゃったよ。古い昔のことだもの。あんときはね、そう、二人とも寒くなったから一緒にあったの」

メダカが泳ぐ水槽あり、小鳥を入れたカゴもある。庭では盆栽いじりをしたり、菊の花を育てたりしている。新しいモノが好きで自然の草花と親しむ、下町気質の、お二人だ。

サービスピ精神がありがたい。この「おもてなし」の気持ちちが友成師の舞台に反映されている。娯楽の原点は、ひとを気持ち良くさせることだ。

衰えぬ高音の美声。心地よい節まわし。登場人物の、卓越した造形能力。たくまざるユーモアが友成師の財産といえよう。

「牧野弥右衛門の駒せめ」ではスリルあふれる馬の調教シーンに興奮、「左甚五郎小田原の猫もち」ではハラハラしながら笑わされる、「神田松」では子供のけなげさと可愛さにホロッとさせられる。

友成師は小太刀の冴えを誇る、職人芸の持ち主だ。

健康の秘訣を聞いてみよう。  
「私は新潟の農家の出でね、根が百姓だから好き嫌いなくなんでも食べる。また二、三日たべなくても平気なんだ」  
「酒は飲めない。煙草はやらない。バクチもやらないんだ。バクチもやれない芸人だからハンパなんだよな。女もね、ありません」の答えに栄子さんがすかさず、

「私と所帯を持つ前はだいぶ遊んだようですよ」と、合いの手の呼吸もピツタリだ。

浪曲の若手へのアドバイスは。「浪曲の命は節です。新しい感覚を入れて節を大切にしてほしい。お客さん

の目は節穴じゃないんだから。私は身体が節ぶしが痛いけど」  
成熟、達観、無我の境地の友成師は生きる浪曲史といつてよい。修行時代から聞いてみよう。  
「昔はきびしかったよ。幕引きひとつでも、しくじると木がしらで頭がぶちわられるほど、たたかれた」  
「地方に巡業すると「まちまわり」といつてタイコをたたいて町中を宣伝でふれまわった。2、3時間で師匠から25銭もらったな」  
「昭和12年ころ、千円で家が建つ時代に五百円のテーブル掛けをもらったよ」  
「土地土地で芸風を変えないといけません。大阪は軽口で、東京はキリッとして、名古屋はね……」  
と、これからは面白くなるが、へちやうどページが終わりです。この続きは、いずれまた。失礼しました。まず、これまでええ——。チョンチョン。



平成6年(94)春に木馬亭で「若いもんなんかに負けるもん会——83歳 末広友成と木村若友 二人会」の様相(左から進行役の芝清之さん、若友、友成)。「80歳を越えないと理解できない人生の楽しみがあるんです」

浪曲…これほどすばらしい芸は他にはないと  
17  
52  
思います。

浪曲家の皆さん…頑張ってください。  
多くのファンを楽しませて下さい。

葛飾区・坂本豊吉